

満文“天命招福銭”について

吉池孝一

ここに紹介する貨幣は清代の符呪銭であり一般に流通したものではない。貨幣の形態を利用したお守りのようなものである。方孔円銭で、重さは29.8g、大きさは径42.17mm、厚さは3.06mm。満洲文字で書かれた満洲語と、漢字で書かれた漢語の銘文を持つから、二言語併用貨幣ということになる<sup>1</sup>。この種の満文銭がほかで既に紹介されているどうか寡聞にして知らない<sup>2</sup>。満洲文字は流麗な筆書きの有圏点満洲文字となっており読みにくい部分もあるが以下のように判読する。

写真左は次のようである。上 abukai(天の)、下 hese(ことば)、右 hūhuri(福を)、左 isibumbi(及ばせる)とある。漢語に訳すならば“天命招福”ともなるうか。なお isibumbiの語末の字形はやや崩れているが i に相違ない。

写真右は次のようである。上“此符”、下“壓怪”、すなわち“この符は怪を壓する”とある。左右には道教に特有な護符用の文字がある。何らかの合体字であろうが、読み方はわからない。

ふつう、満洲文字で書かれた満洲語は、縦書きで、行は左から右に読み進む。清代初期の太祖ヌルハチの「天命汗銭」や太宗ホンタイジの「天聰汗銭」の銘文も縦書きで左から右に読むようになっている。ところが、この符呪銭の場合、hūhuri(福を) isibumbi(及ばせる)の銘は右から左に読むようになっており、これは漢語風ともいえよう。あるいは“招福”という漢語表現が先にあり、その招福の語順を変えずに、そのまま満洲語に置き換えたものであろうか。なお、発行年であるが、それを推定する根拠をもたないので、なんともいえないが、清代も後半ではなかろうか。



左(やや斜めから撮影)



右

【参考文献】

胡增益 主編 1994. 『新滿漢大詞典』 新疆人民出版社。

<sup>1</sup> 二言語併用貨幣の淵源は古く、紀元前2世紀のインド西北におけるギリシア系バクトリア王国の貨幣銘文に遡る。ギリシア文字・ギリシア語とカローシュティエー文字・インド俗語(ガンダーラ語)の二言語併用貨幣と、ギリシア文字・ギリシア語とブラーフミー文字・インド語の二言語併用貨幣は、ほぼ同時期に出現したため、どちらが先であるかを明らかにすることは難しいが、後代への影響の大きさという点では前者に軍配があがる。

<sup>2</sup> この貨幣自体は古代文字資料館のサイトにおいて2010.5.18付で紹介した。